



表具師
山本博之 Hiroyuki Yamamoto

みやざき Miyazaki Meister マイスター

美しさの中に、優しさともぬくもりがある。卓越した技能によって生命を吹き込まれた逸品。最高の職人を意味する「マイスター」。日常の風景の中で、力強く物づくりをする人を追った。

- ①和紙で裏打ち(裏地をつける)をすると、張りが出る
- ②漆塗りの枠のふすま。金銀の紙片を手作業で散らす高度な技術
- ③古い掛け軸の味わいを残しながら、現代によみがえらせる
- ④モミジの葉をすき込んだ和紙が美しい障子
- ⑤長い付き合いのある所の、ふすまや障子紙などは、いつ注文が来てもいいように保管している



みやざきマイスターは今号で終了します。

表具という、古い掛け軸を手直ししたり、ふすまやびょうぶを作ったりするというイメージを抱いていた。宮崎市瀬頭2丁目の山本静堂に入ると、それはもちろんだが、洋画の額や書の額、和紙で出来たついたてなども並んでいる。

代表の山本博之さん(70歳・同市在住)は「今は壁紙や障子紙を張ったり、作品演出のためのデザインもしています」と話す。家一軒丸ごとの内装や作品の額装など、一度、付き合いが始まると、数十年、あるいは次世代まで続く仕事である。

作品を生かすデザイナー

店の奥の作業場をのぞいた。古

い掛け軸が持ち込まれており、女性を描いた絹の裂(きれ)が、はがれそうになっていた。「年数を経たなりの『味わい』を残しながら、絵を生かすような掛け軸にするのが技術。周囲の布は、絵を引き立てる色合いを職人それぞれのセンスで選びます。デザイナーでもありませんよ」と山本さん。

古い物の場合はまず、ぬるま湯や特殊な薬品で洗う。裂の耐久性を見ながら、慎重に進める作業だ。絹などの生地よりも、和紙の方が強い。和紙と墨は千年もつという。

次に裏地をつける作業。掛け軸と額装では、使う和紙の厚さや、のりの付け方が異なる。紙や裂の縦目と横目が交互になるように重



店内の壁には柿渋染めの和紙。次男・健二さんのアイデア

ねると、パリッと張りが出る。掛け軸の場合は、周りに使う生地も全て裏地をつける。「それぞれ、生地の強度が違うので、全部同じ程度にするのが難しい」

時には貴重な品が持ち込まれたり、絵の一部がはがれた修復が困難な物も持ち込まれたりする。「先祖代々、伝えられた物を大事にしてほしい。どんな状態の物でも、まず、持つてきてみてほしい」。大切に次世代に受け継がれていくことが山本さんの願いだ。

昭和天皇のアルバム作成 古文書の製本も

山本さんの祖父は、水戸で篆刻

(てんこく)師をしていた。父親の代に、1923(大正12)年の関東大震災があり、伯父を頼って宮崎に移住。当時、宮崎で表具店を構える所は、まだ少なかったという。山本さんは19歳で表具師の道へ。それから50年余り。「住居が洋風に変わり、床の間のない家も増え、取り巻く環境が大きく変わった」と振り返る。持ち込まれる物を額装したり直したりするだけでなく、家全体の内部デザインや壁のクロス貼りなども手掛けるようになってきた。

特に印象に残っている仕事がある。1979(昭和54)年の宮崎国民体育大会に昭和天皇が行幸され、加江田溪谷にも立ち寄られ

た。その際に撮った写真のアルバム作成を依頼された。「宮崎産の紙を使用し、宮崎産の桐(きり)の箱に収めたものを作ってほしいという依頼でした。紙を探すのが大変で」。台紙の紙は、宮崎では調達できなかったが、表紙は、以前、西都市穂北で作られていた穂北紙を手に入れ、仕上げた。

最近では、県立図書館に保管されている古文書の「佐土原藩島津家日記」の製本も担当。和綴(とじ)の技術を学び、取り組んだ。これも次の時代へ財産を手渡す大切な仕事となった。

お客さんとの つながりを大切に

現在は、次男の健二さん(39歳)も、額装や内装などを手掛ける。「また、自分とは違ったセンスがあった面白」と山本さん。2色の額縁



数カ月かけて作業に取り組む物も。貴重で興味深い作品が持ち込まれるのも魅力

を重ねたり、書の作品を木材と組み合わせて展示会用に演出したり、随所にオリジナルのアイデアが光る。二人のこれまでの作品を見せてもらった。お客さんのこと、手直して苦勞したことなど、一点一点、全ての作品に当時の思い出が詰まっている。初めに聞いた数十年のお客さんとの付き合いの濃さも一緒に詰まっているようだった。



掛け軸の裂を丁寧に直す山本博之さん



美術展などに出すために額装を依頼する絵や書が多く持ち込まれる。思い出にと、子どもさんの書を額装する人も



DATA
山本山静堂
宮崎市瀬頭2-3-17
☎0985-27-5515